

〔書評〕

日本大学文理学部地理学教室編

日本大学地理学科五十周年記念論文集

― 関東とその周辺 ―

この本、頭のいい「変容」の本とでもいおうか。その理由は、次のようなことからである。その「刊行のことば」によれば、「日本大学地理学科の歴史は、奇しくも昭和の年代とその歩みを一にし、今年五十年の時を刻むこと」となり、ここにこの記念論文集がつくられた。

一見して、副題にテーマがあり、目次を見て東京と関東という地域が秩序立てられた構成で説明されていることがわかる。論文集という通常の観念をもってすれば、これは奇異に感じることはあるが、しかし、わが学会はすでにその紀要に例を得ている。すなわち毎紀要は常にテーマをもって編集されてきたので、この論文集の多くある姿は、わが学会ときわめて近縁の配慮にもとづいて生れたものであるということになる。こうした点がまず、わが近親感をもってこの論文集を読む契機となったというのは、まんざらお世辞ではない。

「テーマのある論文集」のテーマが東京と関東であることは、偶然ではない。五十年前神田の三崎町に呱呱の声をあげた地理学愛好者の集いが、太りに太って世田谷の一隅に花開いた学生数五〇〇名の大世帯、その間の有為転変はいろいろあるが、東京に生れて東京に育った日大っ子が、変容の激しい首都圏の中核と周辺に眼を向けたのも、また当然といえる。五十年をふりかえっての記念ならば、それはむしろ必然の結果ではなかったか。用意周到の企画によって

編集の柱にこれがとりいれられ、珠玉二十七編が勢揃いした。共同研究もあるので、執筆者は二十八名である。これらの執筆者は、日大の現職教員、卒業生、大学院博士課程修了者の他、学外の旧現講師などで、各論文はこの論文集のためにとくに書きおろされたものという。いずれも、日大に関係のある人たちの価値ある成果である。

この二十七編が五部に整理され、第一部が「関東の社会」、第二部が「関東の自然」、第三部は「東京周辺の変容」、第四部は「東京外縁の伝統と変容」、第五部は「関東周辺の社会と自然」ということになっている。この構成でわかるように、この五部自体、すでに一種の地域区分となっており、しかも、各部に収められた論文の内容と部の配列とによって、それとわかるような仕組みになっているのが、まさに冒頭にきりだした、編者の頭のいいところなのだ。

頭のいいのは、それだけにとどまらない。目次をみるとそれがわかるのだが、東京市街地域のひとまわり外側の地、つまり東京近郊地は「東京周辺」として捉えていること、さらにそのひとまわり外側の地帯、つまり関東地方一帯は「東京外縁」として捉えていること、たとえば千葉、市原は「周辺」であるが、九十九里平野は「外縁」であり、多摩丘陵は「周辺」であるが、丹沢山地煤ヶ谷は「外縁」である。そして中部地方は「関東周辺」ということになる。

しからば、関東自体はどうなるかというところ、関東地方や関東平野のような全般をこれに当て、それを「社会」と「自然」にわけのだが、これがまた頭のいいところで、普通ならば自然を先におき、社会をあとにするところだが、頭のいい編者はそうはしない。あざやかに社会を第一部とし、自然を第二部とする。そこに、地域の文化構造

にスポットを当てた着眼がよみとれる。そして、この二部が総論だ。ところで、このような「地域区分」の根底はなにか。ほかでもない、「変容」である。変容の激しいのは「周辺」であり、伝統が残され、しかも変容しつつあるのが「外縁」である。この「区分」によると、地域の性格は俄然はつきりしてくるのではないか。各論文の内容を読まなくても、目次をみただけでわかるように工夫されている。頭のいいゆえんであり、変容の本であるゆえんである。

一部、二部が総論だとすれば、三部以下は各論の形だが、もとよりこれは地誌ではない。当然のことながら、各論文は個々に脈絡なく書かれている。したがって、これをどう配列するかは、編集者の頭を悩ますところであるが、部を設定して、各部のなかの順序は、地誌でない以上、どちらでもよいという方式をとっている。見た目に仕上りはスマートにできている。こうして、編者は最後にまた、もうひとつ頭のいいところをみせた。

さらに、縮めくりがいい。B5判の大型で、三六二ページ、厚手の上質紙と品のいいクロス張りの表紙に金文字の題字を沈ませた豪華、ぜいたくな装幀は、気品と風格をもたせて、さすが。

発行 日本大学文理学部地理学教室、発売元 古今書院、B5判
8ポ2段組 三六二ページ、定価四五〇〇円。(山口恵一郎)

高重 進著 古代・中世の耕地と村落

本書は、著者が広島大学文学部に提出された学位論文であり、昭和二十九年の処女論文にはじまる既発表論文十二編に、未発表の近作二編を加えて構成されたものである。歴史地理学はもとより、歴

史学の分野にも大きな影響を及ぼして来た著者の主要論文が、新たに再編・体系化されて刊行された意義は大きく、歴史地理学に関心を有する者にとって、かねてより待望久しかった書である。

さて、本書は「古代の耕地と村落」と題された「前編」と、「中世の耕地と村落」と題された「後編」とから成っている。

第一章の「古代の耕地」においては、「畿内・中間地域」では畠・園地・宅地が分離されていたが、九州における園の検討から「辺境地域」では園地と宅地は分離していなかったと推定する。また、陸田・園地も「実体は畠」であったと結論し、田品が一坪単位に一括して付されていたことについても一節を割いている。

第二章では「条里地域における古代村落の成立とその変遷」がテーマとなり、「編戸↓里の成立↓条里による耕地の整備↓郷域の確定」というプロセスが推定される。ここでは「郷戸実体説」が支持され、その崩壊と郷里制成立との対応が想定される。さらに讃岐国多度郡に関して郷域の復原も試みられ、論を進めて五〇戸(郷戸)と田一九五町、宅地一〇町、園地四五町から成る里(郷)の規模が推定されている。

第三章は、「初期荘園村落」と題された「讃岐国山田郡弘福寺領田」と「阿波国東大寺領新島庄」の現地比定を中心に据えた事例研究である。

第四章「中世の耕地」では畠の「存在形態」が検討され、戸田芳実説批判の形で展開された「かたあらし」||「二圃制」否定論が収められている。さらに、灌漑をめぐる「普通寺領田」あるいは満濃池の研究から、溜池築造の目的が灌漑条件の改善にあったことなど